

# 学校令以前における女子体育関係名辞について

掛 水 通 子

## はじめに

明治期における「体育」の概念形成過程については木下<sup>1)</sup>が詳細に報告している。木下によれば、明治以前には「体育」という表現もその概念も存在せず明治期になると physical education の概念が導入され、その翻訳を通して概念形成が始まった。明治8年に「身体に関する教育」あるいは「身体(の)教育」と表現され、身体教育の概念を示すことにはじまり、明治9年に近藤鎮三により「体育」と表現され、明治11年に体操伝習所が公文書で「体育」を用いたことにより「体育」の表現が定着したとされる。この「体育」は三育主義に立脚していた。

今日、「女子体育」という名辞が存在する。しかし、この名辞は当初から存在していたのではなかった。男子を付していないが、「体育」は男子のためのものであり、女性の地位がそうであったように「女子体育」は「社会の負性を背負う存在<sup>2)</sup>」として誕生することになる。「女子体育」の概念形成過程については、まだ十分に検討されていない。

本稿では「女子体育」に関する名辞がどのようにして使われ始めたのであるか、女子を付したことにより「体育」とどのような違いを生じたのかについて、学校令以前を対象として主要教育関係雑誌、体育関係書等により考察する。

## 1. 体操伝習所設立以前の女子体育関係名辞

### (1) 体術から

学制では学校体育に関する教科名は小学校で「養生法」と「体術」と名付けられ、翌明治6年5月の改正小学教則で「体術」は「体操」と改められ以後昭和16年まで用いられた。改正小学教則で初めて、「体操」は榊中体操法図、東京師範学校体操図によることが示されたが、両者共に女子に対する記述も図も見られない。

明治初期において体育は欧米の衛生書、遊戯書、体育書等の翻訳紹介、外国人教師の雇入れにより形成され始める。明治6年7月には横瀬、阿部により、「アメリカ医学家コーミング氏ノ生理書ヨリ抄訳」した「西洋養生論 全二冊」が出版された。下編は「齒ノ事」、「運動ノ事」、「眼ヲ用フル事」、「浴ノ事」、「衣服ノ事」、「出血ノ事」、「附録 保健の規則」から成り「運動ノ事」が最も紙数を費している。運動の重要性等の理論面と「体術」、「柔体術」、「散歩」などの実際の記述は柔体術に見られ、「柔体術トハ婦女子ノ行フ所ノ溫柔ナル体術ニシテ箠撻ヲ転シ珠玉ヲ弄シ弓剪ヲ取テ射術ヲ試ムル等ノ

類ヲ以テ四支ノ運動ヲ教フルモノナリ平生此業ニ従事スル時ハ筋骨ヲ健壯ニシ皮膚ヲ潤美ニシテ病害ヲ驅除ス婦女子ニ於テ實ニ恰好ナル術ト云ヘシ<sup>3)</sup>」と述べている。女子の行う溫柔な体術が柔体術であるとされたのである。柔体術が輪回しや珠玉遊びや弓射であるのに対して体術は「登攀，踊躍，奔馳，飛揚等ノ数技」と、異なるものであった。

オランダ人ファン・カステールは、ロンドンで1873年にエル・ファレンタイン女史の著した「ゲアルス アウン ブック」を訳した「童女筌」二巻を文部省から発行した。少女の様々な事業を述べたものであり、明治9年7月の第一巻は遊戯が多くを占めており、身体的な遊戯も含まれている。「クロッケー」，「盃及ヒ球」，「弓及ヒ箭」，「カリスゼニックス」，「体術」，「跳舞」等があげられ、特に「カリスゼニックス」は『夫レ「カリスゼニックス」ト称スルモノハ体術中ノ軟和ナル戯ニシテ兒女輩ニ恰好適當スルモノト做ス<sup>4)</sup>』としている。体術の中の軟和な戯が少女に適していると述べられたのである。イギリスの小学校で採用され家庭の児童も愛好しているものであった。体術では「危難」を生じることがあるがカリスゼニックスはその心配がなく、身体を強くし養生になるとしている。また、「弓及ヒ箭」，「跳舞」の項でも運動によって健康となることができることが述べられている。

少ない例ではあるが、女子は溫柔な、あるいは軟和な運動が適していると考えられ、体術から派生し「柔体術」，「体術中ノ軟和ナル戯（カリスゼニックス）」などの表現が始まったのであった。

## (2) 文部省雑誌<sup>5)</sup>における女子教育関係名辞

体育は身体教育を短縮した語であるから教育は体育よりも古くから存在した。女子体育は体育から派生したのであるか、あるいは明治初期において既に表現され始めていた「女子教育」の影響を受けて派生したのであるかを探る一助とするために文部省雑誌における女子および女子教育関係名辞の使用法について検討する。

文部省雑誌9号（明治7年5月24日）の「学校督務米人ダウキッド・モルレー学事開申」では「女子ノ教育」を用い、これは文部省が既に深く注意する所であると述べている。女子を表すものとして「婦人」，「婦女」も用い女子の学校は「女学校」と表現された。

同誌18号（同年7月15日）では「婦女教育」と「ノ」を用いない形が使われた。

教育雑誌1号（明治9年4月17日）では「女子教育」が用いられ同誌23号（明治9年12月27日）では表題に「女子教育論」が掲げられ、文中では「女子ノ教育」が用いられた。

「女子」については多くの表現が用いられ例えば同誌35号（明治10年5月31日）の近藤鎮三訳の「字国ユリー・ビュロー女 女子教育の演説」では表題は「女子」であるが、文中では「婦女（ノ職務）」，「女（教師）」，「家婦」，「婦人」，「女兒」を用いている。同様に同誌47号（明治10年10月30日）の「報知新聞抄 現時ノ女子教育ノ欠所」では「女（学校）」，「女兒」，「女人」，「婦女」，「女兒（教育）」，「女（教）」，「女（生徒）」など様々な表現がされた。

また、女子と他の教育関係語の組み合わせでは「女子師範学校」，「女教員」，「女子学校」，「婦人ノ教員」などと表現された。

以上をまとめると、女子を表す語として「女子」，「婦人」，「婦女」，「女」，「家婦」，「女兒」，「女人」等が用いられ、教育との組み合わせは「女子ノ教育」，「婦女教育」，

「女子教育」，「女児教育」の順に現れた。他の教育関係語との組み合わせでは用いられた「女学校」，「女教師」，「女生徒」，「女教員」のように女を付し「女教育」とする形は見られなかった。

### (3) 女子身体の教育

女子も体操を学ばなければならないことは外国の教育論の紹介の中でも論じられた。文部省雑誌明治8年8号(4月19日)の「獨乙ドクトルリーケ教育論摘訳」ではプラトンの説が紹介され、最も緊要な課業は体操術であり、「婦女子モ亦体操ヲ学ヒ武芸ヲ講スベシ蓋国家安危ノ秋ニ於テハ女流ト雖攻防ノ用ニ充ンコトヲ欲スルナリ<sup>6)</sup>」と女子も体操を学び攻防にも参加すべきであるとの考えが示された。

教育雑誌3号(明治9年5月8日)の近藤鎮三訳「獨乙教育書抄女学校<sup>7)</sup>」では、「女子の性ハ男子ト異ナル所」があるから両性を混同して教えたなら「其心性儀容ヲ損害スルコトアルベシ」と体操のみは小学初級から男女を分けて教えるべきと述べられた。12歳をすぎたら他の学科も男女を分けて教えるべきでありその目的は「夫ヲ扶ケ児ヲ育シ家ヲ治ムルノ方法ニ熟達スル」ことであった。体操は12歳から16歳まで欠くべからざるものであり体操の他、踏舞も良いとし、踏舞は「体格ヲ美ニスル」もので体操は「坐立進退ヲ齊整シ以テ外貌ヲ裝飾」するためであった。そして、これまで論じてきたことを「右ニ論スル所ノ女子身体ノ教育」と述べ「女子身体ノ教育」と表現している。これは男子と区別した女子のための身体教育であった。

教育雑誌52号(明治10年12月25日)の四屋訳「男女教育方法別異論抄 米人醫學博士クラック氏説<sup>8)</sup>」では「女子ノ身体ニ適シタル教育法ヲ以テ之ヲ訓練セバ女子ハ必ズ男子ニ優ルノ地位ニ至ルベキナリ」と述べられ、身体教育に限ったことではなかったが「女子ノ身体ニ適シタル教育法」が用いられた。女子に適しており「身体ノ結構ヲ害シ其生理ヲ損スルノ患ナキ法」で教育すれば良い結果が得られるとしている。

まだ「体育」が定着していない時それに相当する「身体教育」に女子を付して「女子身体教育」と表現され、男子と異なる身体を持つ女子には「女子の身体に適したる教育法」が必要とされたのである。

## 2 体操伝習所設立以後の女子体育関係名辞

### (1) 体操伝習所の「女子体操」

リーランドは明治11年6月に来日後国内を視察し体操伝習所長伊沢修二に意見書を呈した。その中で、国内で行われていた陸軍体操所の方法は兵事本分の人物に適当な多力体操術であり、他の学校においても「男女ノ別ナク同ジク之ト同一ノ方法ヲ用ヒタルガ如シ然レドモ此方法ハ貴下ノ曾テ目識セラレタル如ク静和ナル智力ヲ要スル業ニ従事セントスル諸人及ビ年少ノ女子ノ為ニハ全ク不適当ノモノナリ<sup>9)</sup>」と全ての人に同じ方法を用いてはならないことを述べている。開設当初の体操伝習所規則<sup>10)</sup>によると学科目は「体操術、英学、和漢学、数学、理学、図画」であり、体操術は「男子体操術、女子体操術、幼児体操術、美容術(カリセニックス)及ヒ調聲操法(ヴラカロジムナスチックス)」とされ、全ての人に同じ方法を用いるのではなく男子、女子に分けられ、女子の体操は「女子体操術」と名付けられ「女子体操」の使用は既に

始まっていた。

11月からリーランドは女子師範学校生徒に体操を指導し始めた。師範学校での指導を希望したのはリーランドであり師範学校を巣立つ教師たちが、日本のあらゆる方面に体育の主旨、とりわけその実際を紹介できるということであった<sup>11)</sup>。リーランドは「師範学校の百二十五名の美しい女学生の実技練習を毎日一時間担当することになった<sup>12)</sup>。」と記しており、「啞鈴、棒、豆囊」を練習したとしている。文部省年報によると生徒を2部に分け各部30分ずつの指導であり「米国女子体操ノ方法ヲ斟酌<sup>13)</sup>」したものとしている。我が国の「女子体操」は米国女子体操の「斟酌」により始まったのであった。伊沢への意見書では女子師範学校に「体操術ヲ布教」し、「該校ニ於テハ該術能ク其功ヲ奏シタリトコレ即チ余等ガ最モ喜ブ所ニシテ他校ノ如キモ亦一様ノ成功ニ至ラント希望ス<sup>9)</sup>」と述べられた。その年女子師範学校では生徒の疾病が減少し健康を回復した者が多く、その原因は体操を演習した功が最も多いと報告された<sup>13)</sup>。

明治12年7月発行のリーランド氏口授、久松義典筆記の「体育新書」では「女子体操ノ如キモ此技藝中ヨリ少ク斟酌スル所アレハ亦施行スルヘヲ得ベシ但シ別ニ適宜ノ新技アレハ尚追テ記述セントス<sup>14)</sup>」とし、特に「女子体操」については具体的に述べておらず、一般の体操から「少ク斟酌」するものであった。

明治13年以後に、おそらく坪井玄道によって記されたとされている「李蘭士氏講義体育論」では「女子体操」等の名辞を用いていない。女子に関する記述としては、女子は遊戯の時間が少なく衣服で緊束しているから完全発育ができないこと、同じ女子の間にも体軀に大きな差があり、下等人民の婦人の方が上等婦人より壮健であり、その差は主に戸外で運動するか否かによると運動の重要性が述べられた。体育の歴史の項では、スパルタでは女子も7歳になれば「練体」の一課を始め、「馳走する事、跳走する事、角力する事、小槍を投ずる事、総て男子の如く一様に体操を為す。但男子の如く烈しからざるのみ。如斯して健康なる両親を造り、以て健全なる子孫を保存せんとせり<sup>15)</sup>」と女子も体操をするが男子のように烈しくないこと、体操により健康な両親を作り、健全な子孫を保存しようとしていることが紹介された。

明治15年6月に体操伝習所から「新制体操法」と「新撰体操書」が出版された。「新制体操法」は伝習所一期卒業生がリーランドに学んだ体操術を基礎とし広く欧米の書を参考として記したものであり、「新撰体操書」は、体操伝習所、東京師範学校、東京女子師範学校等の生徒に実地教授したことを筆記したものであった。

「新制体操法」についてみると、女子と体育関係語の組み合わせは「女子啞鈴」、「女子整頓法」、「女子啞鈴体操」がみられる。実技内容が記載されたものは「女子啞鈴体操」のみであったが、それだけで十分であるとしたのではなく、「新撰体操書」を参考にするようにとのことであった。整頓法は新撰体操書に含まれていないが、女子の方法は新制体操法に示さず、「女子整頓法ノ如キハ別ニ之ヲ示サバ少シク通常整頓法ニ折衷セハ敢テ不可ナルヲナカルヘシ<sup>16)</sup>」と整頓法から「折衷」するように示されたのである。ただ一つ内容が示された「女子啞鈴体操」は「女子啞鈴ノ如キハ専ラ其風ヲ酌量シテ少シク之ニ困難ノ運動ヲ加ヘタリ<sup>16)</sup>」としているが、男子の25種に対し女子は18種と少なく内容も軽減されていた。

「新撰体操書」には女子体育関係名辞は用いられていない。豆囊、徒手、啞鈴、球等の体操は着物姿で体操する女性の絵が描かれていることから女子も体操の対象となっていることはわ

かるが女子に対する記述は少なく、徒手演習は小学生、幼稚園生と14,5歳以下の女兒に適すること、啞鈴は男子用と女子用の重さが違うこと、豆囊演習は「滑稽状ノ歡樂ヲ以テスルモノ」であるから最も「児童及ビ男女学校ニ適応ス」などが述べられている<sup>17)</sup>にすぎない。

伝習所卒業生横井琢磨はリーランドの教えに自己の考えを加えて明治16年12月に「体育論」を著した。敵国を攻撃しようとする時はその国の女子の状態を見てその国の兵の強弱を知ったという仏国帝の例やリーランド同様スパルタの例を挙げ、母親、両親が健全であれば子孫も健全であること<sup>18)</sup>を述べるが女子体育関係名辞は使用していない。

同じく伝習所卒業生の遊作盈作は明治17年2月に「新撰小学体育全書上中下」を著した。中之巻は米国の美容術書に基き体育書を加えて編集したものであり、下之巻はリーランドから教授された体育法を筆記する傍ら、同氏著述の体操書を抄訳したものであった。中之巻では女子の為に設けられたのは「徒手体操第二教」のみであった。「本教ハ特ニ女子ノ為ニ設ケタル徒手体操ナリ然レトモ男子モ亦行フヲ得ベシ<sup>19)</sup>」と、「特ニ女子ノ為ニ設ケタル徒手体操」と表現している。この第二教は、新撰体操書が着物姿であったのに対して洋服姿となっている点は異なるものの同書徒手演習第一とほぼ同様である。下之巻の女子に対する記述は「啞鈴体操ヲ行ハシメントスルトキハ其操技中、少シク斟酌セサルヘカラス<sup>20)</sup>」と示された点のみである。

その後の女子師範学校の体操伝習所指導の体操についてみると、明治15年度までは甲乙組それぞれ30分ずつ課していたが、16年度からは20分ずつになっている。明治15年度は「甲組徒手、啞鈴、球竿等ニシテ時々棍棒木環等ヲ演習セシメ乙組ニ在リテハ専ラ徒手啞鈴ノ体操ヲ演習セシム<sup>21)</sup>」と報告されている。同16年度は「矯正術、徒手、啞鈴、球竿、豆囊等ノ諸運動ヲ主トシ間ニ女子ニ適切ナル木環、棍棒等ヲ交ヘ又ハ戶外遊戯中最嫺雅ノ種類ヲ擇ヒテ之ヲ演習セシム<sup>22)</sup>」、同17年度は「整頓法、矯正術、徒手、啞鈴ノ諸運動ハ既ニ其一斑ヲ修了シ殊ニ豆囊ノ技ニ至リテハ女子ニ最も適切ナル運動タルヘキヲ以テ此術ニ長スルモノ最も多シ又球竿、棍棒、木環等ノ諸運動モ適宜ノ方法ニ據リテ之ヲ授ケ時トシテハ戶外遊戯中特ニ女子ニ適切ナル優雅嫺雅ノ種類ヲ擇ヒテ之ヲ演習セシム<sup>23)</sup>」と報告された。これらの報告から最も女子に適していると考えられたのは豆囊であり、啞鈴、矯正術、整頓法、徒手がそれに次ぎ、球竿、木環、棍棒は女子に対しては方法を考えて授けられ、16年度以降はこれに女子に適切な優雅嫺雅な遊戯も課されたことがわかる。

リーランドにより明治11年に「女子体操」が用いられ始め、それは男子の体操と米国女子体操からの斟酌であり、その内容は女子師範学校での指導の中に見ることができるのである。

## (2) その他の「女子体操」、「女子遊戯」など

教育雑誌 103 号（明治12年7月30日）には伊藤平蔵訳「佛人テリー氏母親ノ心得抄 女子体操論<sup>24)</sup>」が紹介された。同誌初の「女子体操」の表題への登場であった。男子の体操術は多いが、女子に教える時はこの中から「除去スベキモノ」が極めて多い。それは「勇敢ノ性質ヲ要スルノ技」と「女子ニハ甚ダ不適当ナ姿容ヲサセルモノ」であると述べている。ここでも「男子の体操」を基にしてそこから不都合なものを取り除いたものが「女子体操」であり、その目的は「筋力ヲ發育強固ニシ其成長ヲ容易ニシテ其四肢百体ノ障害ヲ除去」することであった。

明治13年10月に吉川政典編「新奇女子遊戯法<sup>25)</sup>」が出版された。英人、エル・ファレンタイン女史の2, 3の書を抄訳し図を日本風に改めたものであった。女子体育関係名辞の書名への

登場の初の例であろう。

衛生書についてみると、「ドイツの学校衛生を最初にわが国に紹介した本<sup>26)</sup>」として評価されている大河本聰松抄訳「学校衛生論」が明治13年12月に出版された。学校の諸衛生についての38章から成り第5章の「男女ノ児童」では、女子は男子より、「体質ハ甚ダ蒲柳ニシテ誠ニ其害ニ耐ヘ難イ」ことと「静坐」することが多いことから「畸形」に罹ることが多いと述べられた。それを治すためには、「小学校以上ノ女子学校ニ於テ時間ト教科トニ付テ純然タル女教師ヲシテ女子ニ適當ノ体操ヲ行ハシメンハアルヘカラス<sup>27)</sup>」と述べられ「女子ニ適當ノ体操」を女教師により課することが示された。

明治16年11月に松山誠二は「学校衛生論」を出版した。米英独の学校衛生書から引用して自己の見解に基いて説を立てており、日本人編集として初の衛生書であると評価されている<sup>28)</sup>。5章のうち「生徒身体ノ事」の章では、虚弱な者と婦人には散歩を勧め、幼女は毎日戸外で数時間遊戯運動をして筋骨を使用し脊梁を強くすることによって脊梁屈撓を防ぐことができると述べている。体操は危険と考えて嫌う父母があるがそうではなく、「女児ノ体格ヲ強實ニシ動作ヲ活潑ナラシムル者」であるから「女学校ニ於テモ輕易ノ体操ヲ行フヘシ<sup>29)</sup>」と説いている。女学校には「輕易ノ体操」を勧めているのである。

このように、明治12年以降伝習所以外でも「女子体操論」が紹介されたり「女子遊戯法」の書が発行され、衛生書の中でも「女子ニ適當ノ体操」を課するように説かれた。女子の体操は男子の体操から不適当なものを除いたものであったり輕易な体操であり目的は身体を強くし發育させること、障害を取り除くことなどであった。

### (3) 「女子ノ体育」

既に「女子身体ノ教育」という表現は見られたが、明治11年以後定着した「体育」を用いて「女子体育」と表現することは今回用いた史料には見出せなかった。「体操」と「体育」は明確に区別して用いない場合も多かったが、「女子体操」は前項で述べてきたようにしばしば用いられていた。こうした中であって前出の明治15年発行の「新制体操法」に「ノ」で結合しての「女子ノ体育」が見出せる。同時に出版された新撰体操書においては「体操」と「体育」は区別して用いているから、この「女子ノ体育」は「女子ノ体操」とは区別できる。同書における体育は知育に対するものであり、体育法はアマースト大学で行われていた方法で「身体運動ノ方法ヲ主トシ加フルニ解剖生理健全学ヲ以テ之ヲ裨補ス」としている。目的は健康であり、運動により「精神ヲ快爽ニシ身体ノ諸系統ヲ強壯ニシ又随ヒテ全体ノ健康ヲ補益スル」ヲ得ベシ<sup>30)</sup>とするものであった。「新制体操法」で女子の体操の内容が示されたのは「女子啞鈴体操」のみであったが、その中で「女子ノ身体ノ健康活潑ナルハ獨リ其一生ノ幸福ノミナラズ其生スル所ノ子孫ニ至ルマデ其幸福ヲ受クル」実ニ鮮少ナラス是ヲ以テ之ヲ觀レバ女子ノ体育ノ一日モ欠ク可カラザルヤ論ヲ待タザルナリ然リ而シテ女子ノ性タルヤ柔弱ニシテ其動作ノ如キモ疎暴ニ流レサルヲ要スルヲ以テ宜シク之ニ適應スル体操法ヲ撰バザルベカラズ是レ特ニ此法ヲ設クル所以ナリ<sup>31)</sup>」と述べられた。健康活潑となると本人のみならず子孫まで幸福となるから「女子ノ体育」は欠くことができない<sup>32)</sup>のであり柔弱で疎暴になってはならない女子に「適應スル体操法」を課す必要があったのである。

## ま と め

明治初期の体育は欧米の書籍、人物の強い影響を受けて形成された。なかでも、女子の体育に対してもリーランドの与えた影響は大きい。

女子体育名辞は、体術、身体教育、体操、体育など定着しつつあった言語に女子に関する言語が付加されることにより作られた。体術に対しては溫柔を意味した柔を付加した「柔体術」が明治6年7月にみられ、身体教育に対しては「女子身体教育」が明治9年5月にみられた。女子は心性、儀容から男子と異なった身体教育を必要とした。明治10年12月には「女子身体に適した教育」という表現もみられた。体操に対しては明治11年10月の体操伝習所設立時の規則に「女子体操術」があり、以後「女子体操」が使用された。これは「米国女子体操」から斟酌したものであった。「女子体操」は体操から、女子に不適当な姿勢をさせるものを除外したり、少し緩和したりの斟酌をして課された。体操と区別した体育を用いての「女子ノ体育」は明治15年6月の新制体操法にみられ、本人と子孫の幸福のためのものであった。女子は柔弱であり疎暴になってはならないから女子に適応する体操法が設けられたのである。「女子体育」の使用は今回用いた史料には見出せなかった。また、「女教育」という表現が用いられていないのと同様、「女体操」、「女体育」の使用はなかった。

女子体育名辞は単に性別のみを示したのではなく、女子に適した体育などを意味していた。しかし、初めから適したものが作られたのではなく、体育などを元にして斟酌され派生したものであった。

本研究において史料不足から訳語の原語との検討はできなかった。今後の課題としたい。

## 注

- 1) 木下秀明, 日本体育史研究序説, 1971, 不昧堂出版. Pp. 295.
- 2) 鹿野政直, 婦人・女性・おんな—女性史の問い—, 1989, 岩波書店. p.5.
- 3) 横瀬文彦, 阿部弘国, 西洋養生論下, 1873, 東生亀次郎. 10丁.
- 4) カステール訳, 童女笈巻1, 1876, 文部省. p.393.
- 5) 改題後の教育雑誌(明9年4月から15年11月)と文部省教育雑誌(明15年12月から16年4月)を含む。明治初期の教育関係の重要な史料である。
- 6) 「独乙ドクトルリーケ教育論摘訳」, 文部省雑誌, 明治8年第8号, p.13-14. 1875.
- 7) 近藤鎮三訳, 「獨乙教育書抄女学校」, 教育雑誌, 3号, p.1-14. 1876.
- 8) 四屋純三郎訳, 「男女教育方法別異論抄米人医学博士クラック氏説」, 教育雑誌, 52号, p.1-14. 1877.
- 9) 坪井玄道訳, 「体操伝習所訓導米人リーランド氏ヨリ同所長伊澤修ニ呈セル意見書」, 教育雑誌, 94号, p.32. 1879.
- 10) 「体操伝習所伺」, 文部省日誌, 明治11年第17号, p.24. 1878.
- 11) 今村嘉雄, 学校体育の父リーランド博士, 1968, 不昧堂出版. p.223.

- 12) リーランド, 「アマーフト大学におけるクラス幹事へのリーランドの手紙」今村嘉雄, 前掲書11), p.204.
- 13) 「東京師範学校年報」, 文部省第7年報(明治12年), p.352.
- 14) リーランド氏口授, 久松義典筆記, 体育新書, 1879, 五活堂. 凡例 p.2.
- 15) 「李蘭士氏講義体育論」今村嘉雄, 前掲書11), p.160-61.
- 16) 体操伝習所, 新制体操法, 1882, 体操伝習所. p.3-4.
- 17) リーランド述, 坪井玄道訳, 新撰体操書, 1882, 体操伝習所. p.16-19.
- 18) 横井琢磨, 体育論, 1883, 岡山県師範学校. p.181-82.
- 19) 遊佐盈作, 新撰小学体育全書中之巻, 1884, 正宝堂. p.47.
- 20) 遊佐盈作, 新撰小学体育全書下之巻, 1884, 正宝堂. 凡例.
- 21) 「体操伝習所年報」, 文部省第10年報(明治15年), p.891. 1884.
- 22) 「体操伝習所第5年報」, 文部省第11年報(明治16年), p.921. 1885.
- 23) 「体操伝習所第6年報」, 文部省第12年報(明治17年), p.588. 1886.
- 24) 伊藤平蔵訳, 「佛人テリー氏母親ノ心得抄女子体操論」, 教育雑誌, 103号, p.31-40.
- 25) 吉川政興, 新奇女子遊戯法, 1880, 吉川政興. 33丁.
- 26) 吉原英, 近代体育文献集成第二期解説, 1983, 日本図書センター. p.59.
- 27) 大河本聴松抄訳, 学校衛生論, 1880, 壺天堂. p.16-17.
- 28) 吉原英, 前掲書26), p.66.
- 29) 松山誠二, 学校衛生論, 1883, 松山誠二. p.63.
- 30) リーランド述, 坪井玄道訳, 前掲書17), p.4.
- 31) 体操伝習所, 前掲書16), p.58.
- 32) 本書においては健康となり幸福となるのが女子の体育の目的であり, 富国強兵のための「兵を生む母が強くなる」ことは強調されていない。しかし, 前述のスバルタの例のように, 国家の盛衰は女子によると考えられ, そのために女子の体育が必要という国家主義的な考えが長い間掲げられていく。

(平成2年1月受付)